



文部科学省科学研究費補助金
特定領域研究

中世考古学の総合的研究

—学融合を目指した新領域創生—

空間動態論研究部門計画研究 C01-2

北東アジア中世遺跡の考古学的研究

平成 15・16 年度研究成果報告書

研究代表者 白杵 勲（札幌学院大学助教授）

平成 17 年 3 月



例 言

1. 本報告書は、以下の研究の平成 15・16 年度の成果を報告する。研究参加者による調査研究報告、研究論文、資料収集整理等の成果を掲載した。

文部科学省科学研究費補助金特定領域研究 (2)

課題番号 15068212

領域課題名 「中世考古学の総合的研究—学融合を目指した新領域創成—」

区 分 空間動態論研究部門計画研究 C01-2

研究課題名 「北東アジア中世遺跡の考古学的研究」

研究組織

代 表 白杵 勲 (札幌学院大学)

研究分担者 鶴丸俊明 (札幌学院大学)

小畑弘己 (熊本大学部)

白石典之 (新潟大学)

海外研究協力者 D. ツェヴェンドルジ (モンゴル科学アカデミー)

Yu. ニキーチン (ロシア科学アカデミー極東支部)

魏 堅 (中国人民大学)

研究協力者 相馬秀廣 (奈良女子大学)

武田和也 (奈良市教育委員会)

井黒 忍 (大谷大学)

三宅俊彦 (東洋文庫)

研究経費 平成 15 年度 1200 万円

平成 16 年度 900 万円

2. 研究目的

本研究では、北東アジアにおける 10～14 世紀ころの社会を、遺跡を中心とした考古資料から明らかにしようとするものである。特に、金朝を建国した女真族、遼朝を建国した契丹族、モンゴル帝国を建てたモンゴル族の歴史を主要な対象とする。いずれの集団も、世界史的に大きな影響を与えた集団でありながら文献資料に限られるため、その社会の解明に考古資料を活用することが有益である。また、鉄生産・陶磁器生産など当時の社会を特徴付ける広域的な生産・流通の研究の進展にも考古資料の果たす役割は大きい。

具体的な研究内容は、ロシア極東・モンゴルにおける主要遺跡の調査 (城址、宮殿、生産遺跡等)、中国領内も含めた遺跡地理情報の取得、遺跡・出土資料 (陶磁器・貨幣等) の分析による流通の解明、出土植物遺存体による農業生産の解明、出土文字資料の収集分析による政治・生産体制の解明、北東アジアにおける中世土器編年の整備、GIS やインターネットなどを用いた研究成果の情報化と公開活用の促進である。これらの作業には、考古学、歴史学、地理学に加え、文化財科学、情報科学との協業が不可欠であり、本特定領域研究の他部門の研究者に具体的な作業を進めながら学融合を模索していく。さらに地元の研究機関との協力・連携を進めながら研究の国際化を進める。

目 次

平成 15・16 年度の活動概要・・・・・・・・・・ 1

報 告 編・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

ロシア沿海地方金・東夏代城址遺跡の調査	木山克彦・布施和洋	4
ロシア沿海地方出土文字資料の調査	井黒 忍	21
モンゴル国アウラガ遺跡と周辺遺跡の調査	白石典之	22
中国内蒙古自治区契丹・遼代遺跡の調査	武田和哉・高橋学而 澤本光弘・今野春樹	24
平成 16 年度モンゴル国ゴビアルタイ地方現地調査報告	村岡 倫	33
クビライ政権時代のチンカイ地区（筈記）	松田孝一	39

論 考 編・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47

遼金代の長城について-その目的と機能の比較-	今野春樹	48
金代の錢貨流通	三宅俊彦	63
ノヴォポクロフカ 2 城址の調査	N. クラーゲン・Yu. ニキーチン	72

資 料 編・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

北東アジア出土官印集成表（稿）	井黒 忍	80
契丹・遼代石刻文の調査	武田和哉・高橋学而・澤本光弘	97

平成 15・16 年度の活動概要

1. 大規模遺跡調査法の検討

対象とする遺跡の多くが都城・城郭等の大規模遺跡である。そのため、資料化のための効率的調査方法を確立する必要がある。平成 15 年度より、森林調査・環境調査等の野外調査法、縄張り測量などの日本中世城郭研究の方法を参考に、調査法を検討してきた。日本の場合とことなり 2 万 5 千分の 1 地形図などの大縮尺図が入手できないため、位置の把握が困難であることから、GPS を用いた位置測定と測量法を検討してきた。特に森林調査などで用いられるコンパス測量を参考に、レーザーレンジファインダー・電子コンパスを併用した測量を検討してきた。また、GIS との対応が容易なデータ取得を目指し、ESRI 社 ArcView を念頭に、野外データ取得ソフトである ArcPad を用いたデータ取得法を検討してきた。平成 16 年度は上記の方法を、実際にロシア沿海地方調査において用いて、その有効性・問題点を検討した。詳細は、報文を参照されたい。

2. GIS 構築に向けた資料収集と整理

上記の測量成果などを活用する上でも、地形図、標高データ、画像等が必要である、そこで、関連する旧ソ連製地形図、米国地質調査所 (USGS) の提供する全世界高度情報 (SRTM・DEM)、CORONA 衛星画像等を収集し、基盤となる位置・地形等のデータを整備中である。また、城郭等の遺跡に関しては、書籍等で公表されている図面、ロシア科学アカデミー極東支部歴史考古民族研究所所蔵図面などを収集し、順次デジタル化を進めている。また、GIS 作成に関連する地理情報を統一するため、座標系等の基準の統一を図っている。

3. ArcView を用いた GIS 作成

以上の収集データを用いて、実際に ArcView による作業を進め、収集資料を組み合わせたデジタルマップ作成を行っている。平成 16 年度を実際に調査成果を重ね合わせる作業を進めた。

4. 現地調査

ロシア沿海地方では、調査法の検討を行いながら、金・東夏代城郭遺跡の広域調査を進めた。モンゴルでは、モンゴル帝国関連遺跡であるアウラガ宮殿址周辺において周辺遺跡も含めた地域重点調査を進めた。また、中国内蒙古自治区において、契丹都城等の予備的調査を行った。この他に、金陵遺跡など金代の重要遺跡について、関連機関より遺跡の内容・調査の現状について情報を得た。

5. 考古・文献資料の検討

対象遺跡の実体把握を目指すため、金・東夏代遺跡についてロシア・中国の出土文字資料〔印鑑・刻書土器等〕の収集とデータベース化を進めている。また、今年度は流通の実態の解明のために、錢貨に関して公開されている資料収集と分析に着手し、中国東北部と華北地域の比較を行った。また、北東アジア中世土器の広域編年作業も継続して行っている。

6. 海外との連携

ロシア科学アカデミー極東支部歴史考古民族研究所、ロシア国立極東工科大学、ロシア科学アカデミーシベリア支部考古学・民族学研究所、モンゴル科学アカデミー考古学研究所、中国吉林大学辺疆

考古中心ら諸機関との連携を進め、各国での調査・情報収集に協力を得ている。

7. 研究成果公開

研究成果は各種の学会・学術雑誌等で随時公開を図っている。平成16年度には、国際アジア北アフリカ会議（ICANAS－37）において、代表の臼杵が北東アジアの中世土器に関して研究発表を行い、国際的にも成果紹介を行なった。今後はグローバルベースでの成果公開も目指している。また平成15年度末から研究班のホームページを運営しており、随時更新を行なっている。また、昨年より製作を開始しているシャイガ城址の3DCGの改良を今年度も進めており、後日ホームページ等での公開を行う予定である。また、平成16年度より、年度別の成果報告書を刊行し、最終年度には成果の総合的な報告書を刊行する予定でいる。

ホームページ URL <http://jinbunweb.sgu.ac.jp/~siberia/>

8. その他

学融合推進の検討のため、領域各班との連携を検討している。平成15年度には、沿海地方の予備調査へ総括班前川要・A01-1班千田嘉博が参加し、城郭調査に関する助言を得た。また、平成15・16年度にはモンゴル調査の分析・探査にB02-2班の協力を得た。平成16年には、B01-1班との合同会議を開催し、意見・情報交換を行った。

現地調査

平成15年10月12日～10月19日

ロシア連邦沿海地方土城予備調査

平成16年8月5日～8月19日

モンゴル国ヘンティール県アウラガ遺跡および周辺遺跡の調査

平成16年8月7日～8月15日

中国内蒙古自治区契丹・遼関連遺跡予備調査

平成16年10月21日～11月4日

ロシア連邦沿海地方中世土城測量調査

平成17年1月9日～1月20日

中国黒龍江省・吉林省・北京市中世遺跡資料調査

会 議

平成15年11月15・16日：札幌学院大学

C01-2班第1回総合会議

平成15年度は主に全体的な計画、各調査の目的・基準の統一、学融合への展望について協議した。

平成16年12月11・12日：ブラザー文化センター新潟・万代市民会館

C01-2班第2回総合会議・合同会議（B01-1班）

平成16年度は、現地調査の実施を受けた各研究の成果報告と今後の計画について協議し、学融合への取り組みの一つとして、B01-1班との合同会議を行ない、成果の紹介や方法論について協議した。